②母親のネットワークづくりにむけて

乳幼児学級の活動とその課題

角口秀子

一――乳幼児学級とは
二――神奈川区の乳幼児学級について
三――新しい試みの中で
四――仲間づくりをする母親たち
五――乳幼児学級の課題

一――乳幼児学級とは

全国の教育委員会が開設する成人を対象にする学級講座のなかで、大きな比重を占めているものに家庭教育学級がある。一九六三年度に、文部省が家庭教育学級を奨励して以来、全国でたくさんの学級が開設されつづけている（昭和五十七年度の開設数二万四、三三四学級）。

高度経済成長の波により、都市化・核家族化が急激に推し進められ、家庭をとりまく状況や、物的・精神的価値感が著しく変容しはじめていた。そんな中で、子育てに不安を抱いていた親達にとって子どもの心理や発達を「科学的に」とらえ、子育てについて考えようという試みは、実にタイムリーな学習機会の提供であった。当初は、義務教育就学年齢層の子どもに関する学級がほとんどだったが、昭和四十六年の社会教育審議会答申（「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」）及び昭和四十九年の社教審建議（「乳幼児期における家庭教育の振興方策について」）で、乳幼児期の家庭教育に対する配慮が指摘された。こうして、乳幼児期の親を対象とする学級（乳幼児学級）が開設されることになった。

二――神奈川区の乳幼児学級について

私自身が、担当者としてかかわった昭和五十七年度から神奈川区の乳幼児学級を振り返ってみると、最初の年、学級数は区内で三学級（横浜市全体では四〇学級）であった。開設の形態は、学習者の有志ともいえる運営委員会が実施主体となり、区の社会教育係との連携により企画・運営される。この年、運営委員会は三学級とも幼稚園の父母会を主体とし、参加者もほとんどが子供をその幼稚園に通園させている母親だった。参加者の募集は、運営委員の口コミ、幼稚園のお便り、又会場周辺の電柱に手づくりのポスターを掲示すること等によっておこなわれた。

学級のテーマは実生活に即したものが多く、参加者も多く、出席率も高かった。「具体的でよくわかった」「送迎であいさつをするだけの関係から、親同志が友人になれた」等の肯定的な感想が、多かったが①話し合いが建て前論で終ってはいないか、②子育てが母親自身の問題としてとらえられていないのではないか、との反省点が残り、「もっと子供が小さい時に参加したかった」との声が切実感をもって印象に残った。

三――新しい試みの中で

サラリーマンの核家族が多い都市周辺部では、実質的な子育ては母親一人の手に負わされている場合が多い。その母親をとりまく状況といえば、①結婚、夫の転勤により転入した人が多く、居住年数が少なく近隣に友人が少ない。②自分の親世代との育児方法・育児用具等が著しく変化し、〝知恵の伝授〟ともいうべき親からのアドバイスに全幅の信頼を寄せることができない。加えてマスコミからの一方的な情報の氾濫は、育児不安を高めるばかり。③わが子に対面するまで、ほとんど〝赤ちゃん〟に触れたことがないという実体験の不足。さらに、中高層のマンション、団地、社宅ずまいが多く、扉を閉めれば、一日中声をかける人もいない孤独な子育て。加えて、公園が少ない、交通量が激しい、近所に同年齢の遊び友達が少ない、といった劣悪な育児環境。

乳幼児学級はこうした子育て状況の突破口になりえないだろうか。より育児不安の高い層へ、より学習要求の強い層へ、そして子供づれでなければ、学びの場にさえも参加できない母親達を支える学習の場をもちたい、との思いがつのった。

幸い、自ら学習の場を作り出そうとする意欲的な母親や、学ぼうとする若い母親に手助けしようとする方々の協力を得て、昭和五十八年度以降、就園前の子ど

もの親を対象に学級を開設することができた。

学級開設の方針は次の通りであった。

(1)子どもの年齢別に学級を開設する。

①第一子を妊娠中の親（マタニティスクール）

②第一子が○歳児の親（すくすく学級）

③第一子が三歳児の親（のびのび学級）

(2)学習の場に子どもも参加する。

〃子づれでなければ学べない〃ことの当然の帰結であったが、結果的には、①母子関係がよくわかり、適切なアドバイスができる、②〃他の子供の中での我が子〃を見るという客観的な視点を育てる、③子ども同士のかかわりを育てる、といった、学級を特徴づける重要な要素となった。

(3)学習プログラムに父親参加をもりこむ。

(4)母親自身の生き方を考える内容をもりこむ。

(5)話し合いを多くし、話し合いの中から自分自身の考えをまとめていくようにする。

(6)仲間づくり。

❶―すくすく学級について

昭和五十八年秋、はじめて第一子が○歳の親を対象にした「すくすく学級」を開設した。テーマは「手をつなごう!!新米ママ」。子育ての勉強というより、若い母親達の仲間づくりに主眼を置いた。二十五人の募集に対し、三十人が参加し、母親の平均年齢は、二十六歳だった。三カ月から十一カ月の月齢の赤ちゃんをつれての学習であった。講義から得る知識と共に、参加者同志の教え合い、励ましあいが貴重であった。月齢の高い子の親は、〃先輩〃としての自分を意識し、月齢の低い子の親は、我が子のほんのちょっと先の様子を間近かに見ることで、子育ての安心と自信が生まれた。

開講式の日には、我が子しか目に入らなかった母親が、回を重ねる毎に、気軽に側にいる他の子を抱きあげたり、他の子の成長を認め喜び合えるようになっていく。

表―1　すくすく学級プログラム例　　於松見集会所

回	月日	テーマ	講師
1	9／27	開講式・オリエンテーション―友達になろう―	運営委員
2	10／4	0歳児の成長過程（フィルムフォーラム）	〃
3	10／18	赤ちゃんとの出会い(1)0歳児の発達	横浜国大助教授　繁多進
4	10／25	〃　(2)父親の心がまえ	〃
5	11／1	父の役割・母の役割（話し合い）	運営委員
6	11／8	先輩ママに聞く(1)手作りで育てる	乳幼児センター相談員
7	11／15	〃　(2)話し合い	運営委員
8	11／22	地域の中で育てよう	乳幼児センター相談員
9	11／29	赤ちゃんの健康	元県立栄養短大教授　高口保明
10	12／6	閉講式―仲間づくり―	

❷―のびのび学級について

昭和五十九年度には、第一子が三歳児である親を対象に「のびのび学級」を開設した。テーマは、「仲間と共に育つ親子」とした。三歳児ともなると、自我も社会性もめばえ、また、第二子の誕生等により母子関係もより複雑な要素をはらんでくる。子供が社会に適応して、自分自身の可能性をふくらませて成長していくには、閉鎖的になりがちな親子の日常を社会にむかって広げて欲しい。

二十八人の学級生と共に参加した子供は、第二子を含めて四十三人。赤ちゃんはお母さんのおひざの上でとお願いしたが、保育室にあてられたプレールームのにぎやかさ!!保育室と講義室をいったりきたりする子も多く運営委員はヘトヘト。無事に閉講式をむかえた時は、さすがにぐった

表―2　のびのび学級プログラム例　　於松見集会所

回	月日	曜日	内容	講師・助言者
1	10／15	火	開講式・オリエンテーション	運営委員
2	10／22	火	幼児期の成長過程 ―フィルムフォーラム―	運営委員
3	10／29	火	幼児期の成長(1) ―子供のからだを知る―	横浜市民病院小児科部長 土橋光俊
4	11／12	土	幼児期の成長(2) ―心の発達と父母の役割―	横浜国立大学教授 平出彦仁
5	11／12	火	確かな子育て ―話し合い―	運営委員
6	11／19	火	生活を見つめる(1) ―親子で体操―	今井嘉江
7	11／28	木	生活を見つめる(2) ―母親の生き方―	元市立中学校校長 金沢業子
8	12／3	火	社会性を育てる	安部幼稚園園長 安部富士男
9	12／9	火	生活を見つめる(3) ―おもちゃを作る―	運営委員
10	12／17	火	閉講式・今後に向けて	運営委員

りするほどホット安心した。

❸―マタニティスクールについて

最近の女性のライフパターンといえば、学校卒業後ほとんどが職業に就く。そして経済的にも意識的にもかなり自由な生活を謳歌している。結婚退職の風潮も減り、仮に退職しても結婚後又何らかの形で再就職することが多い。第一子の妊娠・出産まで、仕事にレジャーにと夫婦二人の気楽な生活が続く。第一子の妊娠は、二人の愛の結実、新しい生命の誕生と肯定的に受けとめられながらも、特に女性にひきおこされる精神的動揺は大きい。様々な身体的変化・行動の制約、出産によって職場を離れなくてはならない人にとっては、ある種の社会的挫折感。

出産を前に、今一度立ちどまって、自分自身の生き方を見定めて欲しい。自分にとって親になるとは何なのか。自分の人生にとって子育てとは何なのか。そして自分で選んだ子育てとはどんな子育てなのか。子育てが一段落した人達が、よく「子育て中の社会的な欠落は取り返せないほど大きい」と言うのをよく耳にする。こんな悔いを繰り返さないで欲しい。妊娠、出産、子育て期を社会的つながりの中で――友人を持ち、子供が歩み出す地域に目を向けながらすごして欲しい。こんな思いから、昭和五十九年度には、「マタニティスクール」も開設した。テーマは「たしかな力で育てよう!!」

昭和六十一年度のこの学級の参加者は二十三人、平均年齢は二十八歳で、半数が最近まで勤めており、育児休業中の人が三人いた。親との同居は二人のみで、公団・社宅・マンション等の中高層住宅に居住する人は一七人。横浜市内で生まれ育った人は三人で、半数が県外の実家での里帰り分娩を予定していた。学級生の声をひろってみよう。

・不安が解消され、出産が待ちどおしくなった。

・仕事をやめたことで気持ちの整理がついていなかったが、自分の将来について、あせらずに考えられるようになった。

・こんなお産をしたい、こんな育児をしたいという思いが膨らんできた。

・いかに自分の生きがいをもつか、向上心をもち続けるかということが一番大切なことのように思われる。その大きな輪の中に子育ての喜びがあり、家庭の暖かさがあると思う。

・一人で悩みをかかえていないで、夫や新しくできたたくさんのお友達と喜び悩みをわかちあい、励ましあって心豊かな力強い子育てをしていきたい。

六十年度以降、学級数も五学級に増え、学級の形態も少しづつ区内に定着していった。春になると「今年のすくすく学級はいつからですか?」といった問い合わせが入るようになり、また前年の受講生におしえられて同じ団地に住む人が参加したりするようになってきた。昼間の学級がさかんになり、母親達の仲間づくりが進めば進むほど〝働く親のための学級〟への思いがつのった。昼間職場にあるために、もっとバラバラに孤立している働く親たち。働き続けることは、女性の自立にとって大切な要素といわれているけれど、妊娠・出産に伴ってぶつかる一つ一つの現実の何と厳しく心もとないことか。働きながら妊娠・出産をむかえようとする人達が働き続けることの意味を確かめ、子育てへの楽しい夢もふくらませたい。こうして今年度はじめて「働く親のためのライフセミナー」を夜間に開設することができた。

四――仲間づくりをする母親たち

一学級八回～一〇回。約二〇時間の学習内容が参加者の子育てにどれほどの意義をもたらすのか心もとない。だがこの出会いの中で生まれた人とのつながり、身近かな地域に自分達親子をも連ねた人の輪があるという自覚は、その人の子育て状況を豊かにし、内へ内へとむかいがちな家族のあり様を多少豊かに膨らませはしないだろうか。一人か二人の子供を大切に育てる風潮、人とのかかわりを極力避けようとする都会的なスマートさ。「我が子さえいい子なら」「我が家さえ豊かで楽しければ」という思いにとらわ

表―3　マタニティスクールプログラム例　於神大寺地区センター

	期日	時間	内容	講師
1	6／4水	10：00～12：00	新らしい出会いを大切に	運営委員
2	6／11水	〃	赤ちゃん誕生(1) ―無事に出産を迎えるために	県立衛生短大教授 藤田八千代
3	6／14土	〃	親になるとは　家族とは	朝日新聞学芸部記者 都築和人
4	6／18水	〃	伝えます　育てるよろこび	先輩ママ
5	6／25水	〃	子育てと私の生き方	上智大学講師 小西章子
6	7／2水	〃	赤ちゃん誕生(2) ―現場からのアドバイス	愛児センター総婦長 五十嵐広子
7	7／9水	〃	赤ちゃんの発達過程 ―「さくらんぼ坊や2」をみて	運営委員
8	7／16水	〃	たしかな力で育てよう!!	運営委員

表―4　働く親のためのライフセミナープログラム例　　於神奈川公会堂会議室

No.	日時	テーマ	講師（助言者）
1	9／25(木) 18：30 ～20：00	オリエンテーション 「新しい出会いを大切に」 趣旨説明・自己紹介・話合い	運営委員
2	10／2(木) 18：30 ～20：00	元気で働き続けるために① しらず、しらずのうちに無理を重ねていませんか？　自分の身体は、自分で守ろう！	神奈川保健所助産婦 江戸由美子
3	10／9(木) 18：30 ～20：00	仕事・家庭・子供① 本音で語る女の立場・男の立場	神奈川区役所保険年金課 岩田行弘 (財)地下鉄互助会電算室 永島茂子
4	10／18(土) 13：00 ～15：00	仕事・家庭・子供② 「働く母親の時代」というけれど…… 働く女性の意識と子供の気持ちを考えます。	慶応義塾大学教授 岩男寿美子
5	10／23(木) 18：00 ～20：00	イキイキ働こう！ いい仕事をしたい・素敵な人間関係も育てたい。	作家 沖藤典子
6	10／30(木) 18：00 ～20：00	元気で働き続けるために② 出産・子育て期の健康	神奈川保健所助産婦 江戸田由美子
7	11／6(木) 18：30 ～20：00	働きつづける自分の姿、見えてきましたか?! 友達もたくさん欲しいね。	運営委員

れがちな家庭。その陥穽に気づきながらも、具体的な方法がつかめなければ一歩をふみだすことはできない。乳幼児学級に参加した母親の多くは、学級の中での子供同士のかかわり、そして自分自身の人とのかかわりの中で、〝社会的に生きること〟〝地域の中で仲間と共に子育てすること〟の意味を敏感に感じとっていく。

学級開設の目的の一つに「仲間づくり」を位置づけ、運営の面では①学級生を四～五の小グループにわける。②小グループで十分に話し合う時間を繰り返し設ける。③仲間づくり（グループ活動）の具体的なアドバイスや資料提供を積極的に行う。などの配慮も加えたことにより、閉講の頃には「このままわかれたくない」との思いも高まり、ほとんどの学級が、閉講後自主的な母親グループを形成するところとなった。

母親グループの良さは、構成員自身が疎外されるような〝組織〟ではなく、〝自由な活動体〟であることに尽きると思う。

最低限のきまりを作り、多少の会費を集め、役割を分担し合い、月一～二回の活動を維持していく。会場の多くは地区センターや町内会館、晴れた日には公園の時もある。〝子育て〟という共通の目的のために、自分達に必要な活動を自分達で実施していく。

グループの求めている情報を適切に提供し、活動を励まし、活動を豊かにする為のグループ同士の交流の場を設けるなどの行政としての役割をふまえながら、グループ自体がもつ力を信頼して見守りたいと思う。

五――乳幼児学級の課題

現在の子育て状況をふまえ、社会教育の場―乳幼児学級―で何ができるかという点に立って試行錯誤を重ねてきた。勿論、今後に残された課題も多い。

①開設の目的に沿ってどのようなプログラム編成が可能か（どんなプログラムが最も効果的か）。

②社会教育専用施設をもたない本市においては、保育室を確保することが非常にむずかしい。地区センターのプレイルームを借用する場合が多いが、当然、本来の目的でないため、講義室との距離、広さ、不特定な人の出入り、遊具の不足、幼児用トイレの不備等、保育にとって不十分なことが多い。また一学級十万円の委託料（講師謝金、事務費等運営にかかる全てをこの範囲内で賄うことになる）からでは、幼児数にみあった人数の保育者への実費弁償さえおぼつかない、こうした、場所的、経費的な制約の中での安全で内容豊かな保育とは。

③学級数の増設はもとより、いかにして多様な層からの参加者の拡大をはかれるか。

④学級の中での「よい子とよい家庭」のイメージが単一になりやすい。参加者それぞれが、自分の家族状況にあった家庭像を描けるような運営の工夫。

⑤保健所、福祉事務所、児童相談所、保育園、乳幼児家庭教育センター等幅広い他機関との協力。企画・運営にわたって他機関と幅広く連携することによって、乳幼児と家庭をとりまく課題に総合的に対応できる第一歩をふみ出せるのではないか。

市民から寄せられた一つの期待に対して、十分に対応できた時、初めてまた次の期待が生まれるという。社会教育に寄せられる期待が少しでも大きく、少しでも高いものとなっていくよう努力したいと思う。

<神奈川区役所市民課社会教育係>